

英語の達人「斎藤秀三郎」

神 崎 高 明

1 『熟語本位英和中辞典』との出会い

私が兵庫県立龍野高校に入学したのは、東京オリンピックから2年後の1966年（昭和41年）である。高校1年の時、どんな英和辞典を使用していたかは、はっきりとは思いつけないが、親戚の英語好きの叔母からもらった研究社の小型の辞書だったような記憶がある。高校1年から3年まで、何人かの優れた先生に英語を教わったが、なかでも私が尊敬していたのが田野勝彦先生であった。当時、田野先生は、私の高校の中で、もっとも厳しい先生であった。先生は、授業中、時々英語の辞書の話がされたが、その時よく言われたのは、三省堂の『コンサイス英和辞典』を使っている者がいるが、あれは高校生には適さないということであった。今思えば、『コンサイス英和辞典』は、高校生対象の学習辞典というより、大学生あるいは社会人用の一般辞書であると、田野先生は言いたかったのかもしれない。高校2年の時、研究社から『新英和中辞典』が発行された。動詞の文型などが分かりやすく表示されており、高校生にはぴったりの学習辞典であった。田野先生からも勧められ、私はその辞書を購入し、それ以降大学まで愛用した。

田野先生に勧められた辞書がもう一冊ある。それが斎藤秀三郎の『熟語本位英和中辞典』（岩波書店）（初版は1915年（大正4年）、新增補版は1936年（昭和11年）に発行）であった。田野先生に勧められたとおりに、それを購入した。その辞書

は今も私の手元にあるが、開いてみると、1966年（昭和41年）に発行されて、23刷と書かれている。定価は1,500円とある。当時の高校生にとっては、高価な辞書であった。

購入後しばらく使ってみたが、例文と訳語が古めかしく、難解で、内容も高校生のレベルをはるかに超えていると思われたので、途中で使うのを止めてしまった。その後、大学に入ってから、コロケーションを調べるために何度か斎藤の英和中辞典を引いたことがあったが、それ以降40年余りの間、本棚の奥にしまったままになっていた。

2 英語の達人

2012年（平成24年）の秋頃、八木克正先生（当時、関西学院大学教授、現在、同大学名誉教授）から、斎藤秀三郎氏の『熟語本位英和中辞典』（今後、『斎藤中英和』と呼ぶ）が発行されて2015年で100年になるので、それを記念して斎藤中英和の改訂版を出版するので、手伝ってくれないか、という連絡をいただいた。斎藤秀三郎と言えば、高校時代から馴染みのある名前である。私はすぐに承諾の返事を八木先生に送った。

ここで斎藤の英和中辞典の改訂の話の前に、「英語の達人」と言われる斎藤秀三郎とはどのような英語学者であったのかを、歴史を遡って少し見てみよう。

斎藤秀三郎は1866年（慶応2年）仙台藩士斎藤永頼の長男として仙台に生まれた。そして、1871年（明治4年）、5歳の時に仙台藩の藩学「辛未館」で英語を習い始める。1874年（明治7年）、8歳のときに宮城英語学校に入り、13歳で卒業している。斎藤は、今でいう、英語の早期教育を受けて英語の専門家になった人と言える。ただし、海外留学の経験は一度もない。宮城英語学校卒業後、すぐに東京大学予備門に入学し、1880年（明治13年）、14歳で工部大学校（現在の東大工学部の前身）に入学した。工部学校では化学と造船学を専攻したが、外国人教授のディクソン（James Main Dixon）などの影響で英語そのものの研究に興味をもち、在学中に大英百科

事典（ブリタニカ）を2度通読したとの逸話がある。1883年（明治16年）、卒業間際に放校処分を受け、工部学校を退学している。

翌年、斎藤は仙台に戻り、英語塾を開き、その後、仙台英語学校を開いた。土井晩翠は、仙台英語学校の卒業生であった。1887年（明治20年）には第二高等学校助教授になった。1893年（明治26年）には東京に居を移し、第一高等学校教授になっている。1896年（明治29年）には神田に正則英語学校を創設した。その時、斎藤は30歳になっていた。翌年、第一高等学校を辞職し、正則英語学校での教育に専念することになるが、1904年（明治37年）には東京帝大文科大学にも出講している。1915年（大正4年）に『熟語本位英和中辞典』を出版した。1923年（大正12年）、執筆中の『和英大辞典』の原稿の大半を関東大震災で焼失したが、再び執筆に取り掛かり、1928年（昭和3年）に『斎藤和英大辞典』を完成させた。翌年の1929年（昭和4年）に、斎藤は癌のため亡くなった。63歳であった。和英と並行して、『英和大辞典』を執筆していたが、それはHの途中で絶筆となった¹⁾。

斎藤は生涯で200冊以上の著書を出している。そして驚くべきことは、『熟語本位英和中辞典』、『斎藤和英大辞典』などを除いては、ほとんどの著作は英語で書いているという事実である。「英語の達人」であったことは、斎藤に関する様々なエピソードから窺い知ることが出来る。たとえば、大村（1960: 483-484）によれば、斎藤が帝劇で西洋人のやっている芝居（シェークスピアの「ロメオとジュリエット」）をみたとき、酔っぱらって、「てめえ達の英語はなっちゃいねえ、よしちまえ」などと英語で怒鳴りちらしたそうである。斎藤自身の英語に対する自信を表す、斎藤らしいエピソードである。

また、斎藤にノーベル賞を与えようとする動きがあったことは、明治、大正、昭和と生きた斎藤が、当時、英語の斎藤としてきわめて高い評価を国内で得ていたことが分かる重要なエピソードである。1935年（昭和10年）12月3日の東京朝日新聞によれば、「斎藤の英語に関する貴重な研究のうちでも『前置詞大完』は世界英語界でも比類なき努力の結晶であり、学界に貢献する上に非常なものがあるとい

1) 竹下（2011: 88）によれば、実際には斎藤はFまで完成させていたようである。

うところから外務省国際文化事業部当局では、・・・近くノーベル賞委員会に推薦の手続きを採ることになった」(大村 1960: 252-253) とある。

3 熟語本位英和中辞典の改訂

斎藤の『熟語本位英和中辞典』の改訂の作業のため、40年ぶりに斎藤中英和を手に取り、内容を吟味する機会をえた。斎藤中英和の英語学的分析は、また稿を改め別の機会に論じたいと思う。ここでは、斎藤中英和の特長をいくつか挙げるだけに留めることにする。

斎藤中英和の書名は、日本語では『熟語本位英和中辞典』となっているが、その英訳は Saito's Idiomatic English-Japanese Dictionary である。「熟語」は通常 idiomatic と訳されるが、斎藤は idiomatic ではなく idiomatical という聞きなれない用語を使っている²⁾。ここに Saito の思い入れがあることは、容易に想像がつく。実際、斎藤はイデオモロジー研究 (Idiomology) を提唱している。辞書の英文の序文を読んでも、Saito がなぜ idiomatical という用語を取って使用したのかが、簡潔に述べられている。すなわち、Saito にとって idiomatical は idiomatic よりもはるかに意味が広く、諺 (proverbial) や慣用的 (conventional) 表現をも含むものであった。斎藤のこの考え方は近年、我が国でも研究が進み始めたフレイジオロジー (Phraseology) の考え方と軌を一にするところがある。そう考えると斎藤秀三郎のイデオモロジーはフレイジオロジー研究と言っても過言ではない。斎藤は100年以上も前から成句表現に大きな関心を持ち、現在で言うフレイジオロジーを研究していたのである。斎藤はフレイジオロジー研究の先駆者でも

2) 自身で編集した『英語学辞典』の中で、市川三喜は Idiomology について、「おそらく著者の造語であらうが、ギリシャ語の語形成法に従えば idiomatical となるべきもの。Idiomatology は「慣用語句集」の意味であるがほとんど用ひられない」と言っている。しかしながら、大村 (1960: 526) によれば、Saito の Idiomology は *Webster's New International Dictionary of the English Language*. 2nd edition (1950) に掲載されているとのことである。そこでは idiomology は study of idiom と定義されている。

あった。

さて、今回の斎藤中英和の改訂であるが、従来のように辞書中の本文に手を加えるのではなく、斎藤中英和の本文には一切、手を加えず、修正点を欄外に書くという形式をとった。編集作業の過程で多くの発見があったが、ここで幾つか挙げてみよう。

斎藤中英和で挙げられている例文は、彼がこれまで読んできた英書からの引用が多いが、シェークスピアと聖書からの引用が極めて多いことは驚くほどである。斎藤は、クリスチャンである。13歳の時に洗礼を受けている。したがって、英語で聖書を読んでいることは、もちろんであるが、新約聖書についてはギリシャ語でも読んだようである（大村 1960: 513）。また、英和中辞典の編集に当たっては、特に COD (*Concise Oxford Dictionary*) を参考にしている（竹下 2011: 72)³⁾。斎藤中英和の発行される4年前の1911年（明治44年）にCODの初版が発行されているので、斎藤が参考にしたのは当然と言える。

さらに、当時、10巻本のOED (*Oxford English Dictionary* は当時 *New English Dictionary* として発行された) が、数年に1巻ずつ発行されていた。第1巻(A)は1888年に発行され、1909年には第7巻(O)まで発行されていた。その後、1914年にQまで発行している。斎藤は、英和辞典を執筆する時点で、おそらく第7巻まではもっており、参考にしたと思われる。

斎藤中英和で、とりわけ特徴的なのは、取り上げた例文に対する日本語の訳語の非凡さである。この点は、これまで多くの研究者によって指摘されているところである（大村 1960: 417-421）。市川三喜は「殊に instructive なのは斎藤氏の訳語を吟味することで、語々辛苦の跡がありありと現われて居る」と言う。また、西脇順三郎をして「この辞典は単に英語の意味を知るに最も平易であるばかりでなく、その訳語としての日本語が実に豊富である。それがために恐らく日本の熟語的同類語を探すために逆に英語から日本語を引く場合にも非常に便利を感じる程である。」

3) 大村 (1960:538) は、「CODが出たので、自分の仕事の規模に確信を得た」と斎藤が言ったと、伝えている。

と言わしめている。西脇の言う「英語と日本語の間にある熟語的同義語」の存在こそ、斎藤が研究目標とするイデオモロジーの本質であることは明らかである。ここでは、1つだけ例文を挙げてみよう。“There is no saying how a prediction may turn out.”を「当たるも八卦当たらぬも八卦」と訳している。誠に斎藤らしい和訳である。

斎藤中英和の中には語法の説明が満載されている点も特徴の一つに数えていだろう。その説明は、本文のそこかしこに散りばめられているが、特に重要な所は、「注意」として取り上げられている。これも1つだけ取り上げてみよう。twiceの項を見ると、「注意」: 倍数の次には“twice larger”のごとく比較級を用ひず、とある。すなわち、斎藤はtwiceのあとにはas large asを使うのが普通であると、英語学習者に注意を呼びかけている⁴⁾。この「注意」をはじめとして、斎藤中英和の「注意」の多くが、現在もいくつかの英和辞典に引き継がれていることを考えると、斎藤中英和の存在の重さと、のちの時代に与えた影響の大きさを感ぜないわけにはいかない。

明治から、大正、昭和、平成と日本の英文法研究は大きく発展してきた。その過程の中で斎藤秀三郎は戦後、長い間忘れられた存在であった。今、ヨーロッパの言語学界ではフレイジオロジーの研究が盛んである。我が国でも八木克正教授を中心にフレイジオロジーの研究会が行われている。この機会に、斎藤秀三郎の業績が再評価されることが望まれるところである。

参考文献

- 市川三喜(編)(1940)『英語学辞典』研究社
大村喜吉(1960)『斎藤秀三郎伝』吾妻書房
斎藤秀三郎(1936)『熟語本位英和中辞典』(新增補版)岩波書店
斎藤兆史(2000)『英語達人列伝』中公新書
竹下和男(2011)『英語天才斎藤秀三郎』日外アソシエーツ

4) 実際には、twice larger という表現も見られるが、twice as large as の頻度が圧倒的に高い。斎藤は、学習英文法のレベルでは、twice larger は用いるべきではないと言っているのである。